

(2021年7月15日 日本小児科学会 HP 「新型コロナワクチン～子どもならびに子どもに接する成人への接種に対する考え方～」に関する Q&A より一部抜粋)

【新型コロナワクチンを接種するメリット】

- ①海外の小児(12～15歳)への接種経験からの情報では、新型コロナワクチン2回接種後、ワクチン接種群で新型コロナウイルス感染症を発症したのは0/1,119人に対し、プラセボ群(ワクチンを接種していない人)では18/1,110人が新型コロナウイルス感染症を発症したという報告があります。この報告から、新型コロナウイルス感染症に対する高い予防効果が期待できます。またワクチン接種後の抗体価は16～25歳にくらべ12～15歳の方が高かったという結果でした。
- ②自分自身が免疫を持つことが周囲の人を守ることにつながり、大勢の人がワクチンを受けることにより、流行を抑えることができます。

【新型コロナワクチンを接種するデメリット】

- ①国内の医療従事者2万人の調査の結果をみると、接種した同日から翌日にかけて、8～9割の人に接種した腕の痛みや重み、5～6割の人に倦怠感や頭痛、2～3割の人に悪寒や筋肉痛、2割程度の人に38℃以上の発熱がみられると報告されています。しかし、いずれの症状もほとんどの場合は2～3日で軽快するようです。まれに、接種直後にアナフィラキシーという重度のアレルギー反応が起こることがあります。そのため、15～30分間、接種会場で様子を見る必要があります。
- ②まれですが、主に若年の男性においてワクチン接種数日以内に心筋炎が発生することが報告されています。発症した場合でも入院は必要になりますが、ほとんどは軽症であるとされています。

(2021年7月27日 日本感染症学会 ワクチン委員会 COVID-19 ワクチンに関する提言(第3版)より一部抜粋)

12～15歳への mRNA ワクチンの接種

ファイザーのワクチンは、海外の12～15歳を対象とした臨床試験のデータをもとに、わが国でも6月1日から予防接種法の臨時接種として12～15歳に接種が認められました。おもに中学生に当たるこの年齢でも、家庭内、学校生活、クラブ活動などを通じて感染がみられていますので、接種する意義はあると考えます。

しかしながら、わが国での12～15歳を対象とした臨床試験は実施されておらず、安全性の確認が十分ではない状況での承認は拙速な印象を受けます。一方で、小児は感染した場合も多くが無症状から軽症で経過しています。変異株の出現で小児の集団感染の報告もみられますが、日本小児科学会は、「現時点で変異ウイルスが子どもに感染した場合も、従来ウイルスより重症化する可能性を示す証拠はなく、多くが無症状から軽症で経過しています」としています。このような状況の中で、副反応の頻度が比較的高く、長期的な安全性がまだ

確立していない mRNA ワクチンの接種を 12～15 歳に進めるにあたっては、本人と保護者への丁寧な説明が欠かせません。

(2021年6月16日 日本小児科医会 HP 「小児への新型コロナウイルスワクチン接種について日本小児科医会からのメッセージ」)

この度新型コロナウイルスワクチンの一つであるファイザー社コロナウイルス修飾ウリジン RNA ワクチン (SARS-CoV-2)・商品名コミナティ (以下本ワクチン) の添付文書の接種対象者が、今までの「16 歳以上の者」から「12 歳以上の者」へと改訂されたことを受け、今後小児への本ワクチン接種が進む状況を前に、日本小児科医会は「12 歳以上の小児への新型コロナウイルスワクチン接種についての考え方」を提案することといたしました。御承知のように、小児の新型コロナウイルス感染症は従来株だけでなく変異株においても、感染者の多くは無症状ないし軽症であることが分かってきています。一方現在まで我が国では本ワクチンにおいては、この年齢層における効果や安全性についてのデータは得られておらず、諸外国においても接種後短期間での効果と安全性は評価されているものの、接種後何年か経過した状況での効果や安全性については全対象年齢においても評価がされていないのが実情です。しかし本ウイルスは容易に変異を起こしやすいウイルスであることも事実で、変異を繰り返すことにより感染性が強くなる傾向にあり今後も感染拡大が続くであろうこと、さらに今後重篤化しやすくなることも懸念されています。

この状況下では何としてもパンデミックを抑え込むための切り札として、ワクチン接種が拡充され、地域における集団接種やかかりつけ医での個別接種、それに加え企業接種の形での集団接種などが行われ、短期間で可能な限り多くの希望者への接種が可能な対策が講じられてきています。このような流れは、当然小児の接種にも及んでくることになります。しかしながら、本ワクチン接種後の痛みなどの局所的副反応、発熱・倦怠感などの全身的副反応においても、高齢者に比べ年齢の若い方により多く発現することも分かっています。さらに私たちはワクチン成分や接種手技とは直接関連性が薄い、接種時の緊張などからくるこの年齢特有の接種直後に起こる反応や、まれではありますが接種後しばらくたってから起こる反応が生じる可能性があることも、子宮頸がん予防ワクチン (ヒトパピローマウイルスワクチン) 接種後の反応等から認識しております。今後新型コロナウイルスワクチン接種対象年齢がさらに下げられることも予想され、小児への接種をより安全に実施すること、子どもたちを守ることは小児科医にとって極めて重要な責務であると考えています。

今回の本会の提言は子どもたちとそのご家族、さらには友人、学校関係者など多くの方にとって、理想的なワクチン接種体制の構築・運用はどうあるべきか熟慮した上で発表に至ったものです。

医療関係者、教育関係者、行政関係者そして報道関係者の皆さまにおかれましては本提言を熟読いただき、新型コロナウイルスの脅威から子どもたちを心身ともに守ることを使命としている日本小児科医会の活動に十分にご理解とご協力をお願い申し上げます。